

[討論の部]

世界と日本の大学史の流れの中での 東亜同文書院と愛知大学

大島隆雄・加納 寛・渡辺次郎・越知 専・小崎昌業
北嶋繁雄・今泉潤太郎・森 久男・山田義郎・太田 明
河野 眞・豊島 忠・藤田佳久・鈴木規夫・樋口義治

問題提起

大島隆雄 さて、これまでのご報告をふまえて、これから討論に入っていきたいと思います。しかしご報告の内容が多岐にわたり、非常に豊富ですので、限られた時間の中でこの討論を効果的にするために、私若干、恣意的ながら本日の討論のテーマを絞らせていただきたいと思います。それはさしあたり、大きくは3つに分かれると思います。愛知大学の前史と申しますか、中世大学から始まって近代的な欧米の大学が生まれ、さらに明治維新以降日本の旧制大学が欧米の大学の影響を受けて作られるというような段階の話です。前史はその他に旧制大学の歴史を見る場合に時期区分をどうするのか。何をもちいて時期区分するのか。さらには東亜同文書院および東亜同文書院大学が日本の大学史の中でどう位置づけられるのか、われわれは当然その流れのなかにあると思っておりますが、それでいいのかどうか。大学史と大学の一般史からみて、それでいいのかどうかという問題。その他皆さんの中から議論が出ましたらその問題を含めて討論していただきたいと思います。

第2番目は愛知大学になってからの問題です。創立期以降1970年ぐらいまで、いろいろな困難があるわけです。大学自治をめぐる愛大事件、大遭難事件、それからあえて言えば学園紛争、そういうもので愛大の経営は非常な困難に直面しますが、それに愛大は打克ってその基礎がかた

まっていく、そのような問題がもう1つ。

それからもう1つ、今日は学長が来られなかったのでお話がなかったんですが、太田さんがご指摘になった1970年以降、大学が大衆化し、あるいはユニヴァーサル化の中で生じてくる例えば市場主義の問題、大学は個性を出さなければならない、そういった問題について大学の資源を集中的に配分しなければならない。そういった現実的な困難な問題があるわけですし、それには愛大は対処しなければならないけれども、そういった愛大になってからの問題。その点について皆さんも討論していただきたいと思います。

最後は大学史、しかも世界と日本の大学史の流れの中での、東亜同文書院と愛知大学の大学史が持っている意味と言うか意義と言うか、特に学生に対して講義を行なうわけですけども、それは本当に意義があるのかどうか。意義があるとすればどういうことをする必要があるのであるのか。だいたい大まかに3つぐらいに分かれると思うんですけども、何かこの3点以外でこれはぜひ討議せよというご意見がございましたら出していただきたいと思います。と思っておりますが、いかがでしょうか。

加納寛 事業運営等をめぐる問題というのは今の第3点に含まれるんですか。

大島 はい。その他どうでしょうか。私のほうで提起しましたけれどもその中で。

愛大創立期をめぐる

渡辺次郎 愛知大学の卒業生でございます。歳は80になります。もうあまり先がない……。本題からちょっと外れますが、私ちょっと不思議に思っていることがあるんです。何かと申しますと、愛知大学が一番初めに出発した時の職員の構成は、東亜同文書院大学と京城大学から見えた先生がフィフティー・フィフティー、半々でした。私の知っている範囲内で横山先生、四方先生、松坂先生、あとからお見えになった秋葉先生、竹井先生、島本先生、松葉先生、若山先生、ずっと数えましても、記憶が定かでない私でもこれだけの数を言うことができるわけです。そして森谷克己先生はとにかく非常に卓見のある進歩的な方でございます。非常に力強くて、学生が騒いだ時、態度が悪いと言って叱りまして、教師と学生はいかにあるべきかという大変な状態を惹き起こしました。それを契機に学生が大騒ぎをしました。

しかし愛知大学において京城大学と東亜同文書院は車の両輪でございます。アカデミックな雰囲気をもっていたのは京城大学からこられた先生。しかし東亜同文書院からこられた先生方、とくに本間先生と殊に小岩井浄先生は私学としての苦しみ、この豊橋に溶け込もうとする努力、それから地元の優秀な学生をスカウトするべく、さんざん泥にまみれたような仕事も引き受けられたのは事実でございます。しかし東亜同文書院の特異性のみを強調して、京城大学からの先生方のそのようなデータがひょっとすると忘れられてしまうのではないかと非常に心配しています。

私は昭和26年に卒業しておりますので、愛大事件については何も説得力はありませんが、森谷先生はその時の学生の左翼グループがいたずらに敵を作っていく傾向がありました。森谷先生は学生部長を受けられたひとりでございます。あらゆる責任を背負って森谷先生は去っていかれました。森谷先生のお嬢さんの美知子さんがミュンヘン小学校について書かれて、ベストセラーを出さ

れました。お孫さんが手記を出しまして、これも毎日文化賞をとられたと思います。森谷先生は非常に立派な先生でございます。殊に幾人かの先生が名古屋大学へ去られた時にも、森谷先生は厳としてこの学校に留まって、大学を守られました。森谷先生のほか、それから京城大学の先生方、殊に大内先生は大学が発足した1週間後に過労のためにお亡くなりになりました。こういう事実を無視して大学の歴史は成り立たないと思います。この点、愛知大学の生き証人として申し上げたいと思います。

大島 はい。このテーマは非常に重要だと思います。われわれもちゃんと考えなければなりません。一言で申しますと、愛知大学は東亜同文書院だけでなく、京城大学の先生も集まって作られたものであって、それぞれちょっと違った性格を持っていますが、その両輪になって作られた。それについてどう考えるか。現在では少し東亜同文書院、東亜同文書院と言い過ぎるのではないかというようなご批判がこめられていたような気がします。

渡辺 別にそうではありませんから。

大島 ああそうですか。安心いたしました。この問題はどこで討議しますか。やはり前史の中で討議しましょうか。すぐに誰かが答えますと充分まとめができなかつたりします。

渡辺 車の両輪として京城大学の先生方が、とにかく大学においては学問的な分野と、まあまあノーマルな先生と生徒の関係という学風の形成に貢献されました。反面、殊に東亜同文書院の先生方はいわゆる大学の危機、給料も払えないという時に市議会へ、あるいは日本全国への募金もあって大変でした。それは何十億の金ですよ。その金を引出しに歩かれた。それで食料もない、物もない時に、経営陣はおもに同文書院系の先生が担われた。その点格好の良さだけでやっている京城大学のグループに対して反感が起きた。それでガタがきたというのが事実です。それでも森谷先生は何も言わずに黙って去っていかれたのですから。

そういう偉い教育者であったということだけは忘れると困ると私は思います。

大島 分かりました。それでは少し整理して議論したいと思いますが、愛知大学に世界の大学史、あるいは日本の旧制の大学史がどう流れ込むか。それを私はやはり学生に、あるいは学生だけに限りませんがこういう形で一般の方を含めてお話しする時には、道筋をある程度つけたいといけない。それは私はこう考えているんですが、それでよろしいかどうか。つまり今日、北嶋さんがお話しになられたヨーロッパの中世に始まる中世大学というのは、大学の始まりとして非常に重要だけでも、それはいったんヨーロッパが近代を迎えた時に近代的な大学に転化した。イギリスはイギリス、アメリカはアメリカ、ドイツはドイツという形で啓蒙主義的な、あるいは新人文主義的な思想の大学に変化している。そこはやはり抑えておかないといけない。その1つとしてベルリン(=フンボルト)大学の成立もある。

次に日本が近代を迎えたあと、日本の律令時代の大学寮からたどることもできるけれども、主として手本になるのはヨーロッパの大学だろうと。おなじように遅れて近代化したドイツの大学が手本になったとは簡単には言えないですね。帝国大学はそうかも知れない(自信がありませんが)けれども、同志社とか立教などという私学はそうではないと思います。しかし最後は日本流にまとめた。日本の具体的な歴史の中でリンクが生じて、日本型の帝国大学と日本型の私立大学、私立専門学校というのができたのだろう。そういう形で外国の大学の流れが日本に流れ込んできた。外国の大学の影響はそれだけに留まらないわけで、戦後新制大学に変わる時にはアメリカの影響を著しく受けたであろうし、それも戦後の民主的諸改革の問題と同じように日本の内部的な発展であったとか、ないとかいう問題がありますけれども、それでも圧倒的にアメリカの影響を受けただろうと。そしてまた現在のグローバル化の中で競争を強いられている。市場主義が行き渡る中で、日本やド

イツが、新たに従来の大学の機能あるいは形態を再び変えなければならなくなっている。

そういう形で世界の大学史の流れは日本の大学史の流れを規定し、また今日の愛知大学の問題にも及んでいます。私が正しいかどうか分かりませんが、大雑把にそういうことを踏まえて各先生方がお話しになり、学生に理解させていただかないと、どうも話ばかり大き過ぎてなんのことも理解できないような問題があろうかと思います。私が強引に勝手なことを言っているきらいがありますので、皆さんぜひそれについてご意見を頂戴したいと思います。

越知専 いま渡辺さんが発言されたことについて、学問的視野に立った面でなく、事実として愛知大学の創立期を知る者として必要なことであると思います。特にその中で渡辺さんのように事実を体験している人は、この中に何人いるでしょう。おそらく小崎さんはそういう状態をご存じだと思います。大変な財政的苦労をされた本間先生の生きざまを見られたのは小崎さんだけだと思うし、そういう様子を知っているのは渡辺さんだと思います。だから今回はこれを機会に、学問的な問題とは別にして、そういうような愛知大学の創立の原点はどのくらい大変であったかということを生徒に伝えるべきだと思います。あとで小崎さんにご発言をお願いしたいと思います。事実を知っているかどうか。京城大学と東亜同文書院の問題。そして同時に大変な財政問題を克服した。特に愛大事件の時に撮った写真を引き伸ばし焼付けました。いかに大変だったかということ。市からもいただいたものを中断された中で、愛知大学はどういうふうに本間先生がお金の工面をされたか。その苦労談や秘話も、60年を期にして続々と私のところに伝わってきます。愛大事件のことについてもそうです。お金の面についてもそうです。学問的問題としては扱われないかも知れないけれども、事実として伝えるべきことはいくつもごろごろ浮いてきます。

例えば最近、パネル展で2つの話題が出まし

た。1つは本間先生と教え子が、東亜同文書院の最後の卒業証書を持ってきて、その証書を持っていけば当時の帝国大学は口頭試問だけで入学できたんだよと。そのくらい東亜同文書院の卓識・学問は高かったんだという生徒さんがいました。これはそのうちに大々的に発表します。そのくらい愛知大学の前身である東亜同文書院の評価が高かったという事実。もう1つの事実は愛知大学事件の時に取り締まる側として豊橋の警察署長であった大野佐長さん。そのご子息が写真展を見にきました。そして「これは親父です。この写真初めて見ました」。その時分は取り締まる側の警察署長、その息子さんは3人とも全部愛知大学です。愛大事件があった時に長男の大野晃信君は愛知大学の3年生。私は友達です。次男の浩司君が、東京の大学に行きたいと言って大野さん（署長さん）にお話をしたら、「愛知大学のような立派な大学があるんだから、東京の大学に行く必要はない」と言って愛大に入りました。そのお父さんはその時豊橋の市長さんになっていました。2期やられて大博覧会を成功させました。人気のある市長さんでした。愛大事件を取り締まる側の署長さん、そして愛知大学の全てを知っている署長なわけです。そして豊橋の市長になった親父さんという立場。子供さんを3人とも愛知大学へ入れました。そういう事実は本には書いてありません。これからはそういう話題がどんどん出ています。いかに愛知大学が立派な大学であったかということは、たくさんの方が見えています。同時に経済的な困難をどのように克服してきたか、それが今の渡辺さんの発言でも分かる。この方は生き証人ですよ。私初めて今日隣に座って全然渡辺さんを知らなかったわけですが、あなたも愛大の卒業生ですか。

渡辺 僕は創立に参加した学生で、昭和26年に旧制の4期で卒業しました。

越知 だからこういう人達の意見を今のうちにテープに取っておいて、愛大の原点の記録として大事にしていきたいと思います。小崎さんひとつご意見を聞かせてください。おそらくそういうこ

とを知っているのは、ここでは小崎さんしかいないと思います。

小崎昌業 おっしゃる通りだと思います。私は今までいろいろ同文書院の話をしていて、抜けるなと思うことがいっぱいあるんです。それはどういふところかと言うと、今おっしゃったような点なんですね。いちいち今は思い出せなくても、細かい点で京城大学と愛大の間の問題、京城は先生方が多かったですね。同文書院の先生も京城の先生方も半分ずつくらい、東北大学、それから台北大学、その辺の先生がおられました。確かに京城は優秀な先生がおられました。今のようないろいろの問題があつて辞められた方もあるし、他に残られた方もあつたんでしょうが、私は転入で、1年ほどしかおらなかつたものですから、あとのことはよく分かりません。けれど探してみれば、そういう話はいくらでも出てくると思うんです。おっしゃるように今のうちにこういう話を集めて記録しておくことは大事なことだと思います。一般的に知られている話よりも、こういう話が大事だと思います。

越知 抜けている話というのは具体的にはどんなふうにお考えになっていますか。

小崎 例えば小岩井先生は非常に温情が深く、あの人は非常な社会主義者できつい反面があると思われがちですがさあらずで、実際は非常に人情味の深い人であつて、上海で終戦になつて同文書院が全部日本に帰つて学校をつくるなり、別の学校に入らなければならぬ。われわれには今後の日本をいかに再建すべきかという大きな問題があるが、これをどうしたらいいだろうと、そういう問題についてゼミをやつてもらつたんです。私が頼みまして内山書店の裏側のほうに部屋を借りて、1週間に1回ぐらいずつゼミをやつてもらいました。いろんな人が来られていろんな話をされましたが、その時に私は初めて、奥さんの多嘉子さんに会いました。どういう方かなと思つていたら、あとで奥さんになられたと聞きました。その時はまだ奥さんではなかつたんです

が、毎回来ておられました。そんなこともありました。

それから本間先生は私が愛大に来てからですけれども、ちょうど試験があって、われわれは私学の試験だったんです。予科は前の年の12月に試験があって、4月に試験のあったわれわれと一緒に第2年度の入学式があった。われわれは別の試験で来たんですけれども、「お前達、試験が終わったらちょっと助けてくれ」、と言うのは小岩井先生の友人の某氏が選挙に出るが、非常に困っているから応援に行ってほしい。それで東北のほうへ行ったんです。何日もいましたけれども、最初に行った時は何も選挙のことを分かっていないその辺の町のおじさん達が選挙対策をやっていた。それを見ていて初めわれわれは分からないから1日ぐらい黙って、すごいじゃないかを見ていたんですが、われわれのほうで遥かにその辺は上回っていた。と言うのは戦争に行つて、軍隊でいろんな危ないところを渡ってきた人間達ですから、われわれのほうで当然物事を分かっている。これは駄目だからこうしようじゃないか、ということを書いて、そのうち小岩井さんも来られたので、それで方法を変えまして、いろんなことをやって、ついに全国区から当選されました。非常に喜ばれました。その他いろいろ細かい話がありますよ。こんなことを大きな場所で言っていられないから黙っておりますけれども。そういう話を挙げればいくらでも出てくると思いますね。

大島 ありがとうございます。

北嶋繁雄 大島さんが話されたことですが、私も、私自身も大学創立時の時の先生方の経歴・業績をまとめてみてもいいのではないかと感じてお話ししたわけです。例えば本間先生、小岩井先生、玉城先生、山田文雄先生とか。それから私の知っている範囲で言えば丸山薫先生、高桑純夫先生など、たくさんいらっしゃいます。先ほど越知さんが見せてくださった写真集、あれは大変興味深いものです。ちょっと1つ当時の関係者の方がいらっしゃるのをお聞きしたいんですが、愛大ができ

る時に文部省へ出しました書類の中で法人理事の中に鹿島宗二郎という名前があります。ペンネームは吉田東祐という方です。実はこの人が、上海で昭和13年から14年に日中平和工作を陸軍でやっていたんですが、それが2つに分かれていました。参謀本部ロシア課の小野寺機関と、支那課の影佐機関の2つです。このロシア課の吉田東祐氏はこの小野寺機関の一員として平和工作に係わった人です。『二つの国に架ける橋』という本を書いております。小野寺信中佐はのち、スウェーデン駐在武官となりましたが、その夫人、小野寺百合子氏の回想録『バルト海のほとりにて』は、吉田さんの書いたものを読んで、この日中平和工作について書いております。吉田東祐さんは小野寺機関の中で働いていた人です。その時、小野寺機関に出入りしていた方の中に近衛文隆さんの名前があり、近衛文隆さんから日本に帰って近衛文麿氏に手紙を渡すよう託され、小野寺中佐は一時帰国した時、京都から帰京する文麿氏と東海道線の車中で会っております。この近衛文隆氏については、近衛忠大（家系的には文隆氏の孫）という方が、NHKのドキュメント「真珠湾への道」のあと取材した『近衛家の太平洋戦争』（NHK出版2004年）にくわしく書かれています。鹿島宗二郎氏は商大卒で巣鴨高商教授を勤め、共産党シンパであったが転向後、彼のレポートを参謀本部のロシア課が注目し、上海行きを勧められて、現地では新聞記者として情報収集活動をしたようです。どのような経緯で、どなたの推挙で愛知大学の理事に名前を連ねたのか知りたいところです。

渡辺 小池という駅が渥美線にあります。すぐ前に松野という家があります。そこに下宿というか一人暮らしをして、私の友達でしたが愛知大学に長くいて最近死んだんですが、愛知大学の生き証人である大野一石という男が出入りしていたのを記憶しています。たびたび豊橋に来てはその松野という店の2階に住んでみました。

北嶋 鹿島宗二郎氏はあと国土館大学に勤務されています。

渡辺 ああそうですか。ともかく豊橋にみえた時は小池の2階におりました。ともかく愛知大学の学生の大野一石がその店に出入りしていました。鹿島さんが愛大に関係されたかどうかはわかりません。昭和25年以降は名前が消えている。入ってない。

今泉潤太郎 『中国現代工業用語辞典』を出されました。なかなかできが良かったですよ。だからわれわれも参考にいたしました。

渡辺 小崎さんが先ほどご発言されました山岸多嘉子さんは、外務省に記録を残しておりますでしょうか。外務省が昭和20年3月20日に優良邦人として表彰状と金20万円を贈った山岸多嘉子さんです。山岸多嘉子さんは昭和14年6月に大変な発言を行なっている。「日本人であることが恥ずかしい。これからは上海の貧民窟に入って中国人として活躍する」と。それから戦争孤児の救済運動をやられている。そして先ほどのお話ではございせんが、国家主義団体かなにか知りませんが、中国と秘密ルートで和平交渉をやった厳然たる大ボスでございます。小岩井先生と共に弾圧を受けた身でありながら、この愛知大学をつくられました。後輩の大学をいっぺん見てくれと言って関川の町へ行きまして、実際にこんな貧民窟があるだろうと思われるようなすさまじい生活しておられました。本当に小岩井先生が何の私心もなくこの愛知大学をつくられた。これは驚異なことであって、愛知大学は先生本位、生徒本位の大学で、これを作られた先生方の経営努力は素晴らしいものであったと、私は確信しています。

旧制高等教育における同文書院

大島 はい。いろいろ私が初めて聞くようなお話がありまして、なかなか私が言うような討論に入って参りませんが。愛大前史としまして、世界大学史の流れとか、もう1つこんなことは分かりきったことかも知れませんが、東亜同文書院大学の発展はなぜ教育学者の大学史一般の中に入って

こないのか。これは簡単に同文書院が海外にあって、所轄官庁が外務省だから入ってこないのか、それとも難しく入れられないのか。私は入れていいと思うし、また入れなければならないと思うんですが、その辺のところでは何か皆さんご意見ございせんでしょうか。

加納 国際コミュニケーション学部の加納でございます。東亜同文書院がコウモリのような感じになってしまっている。つまり鳥でもなければ獣でもない、というところにその原因の1つがあるのではないかと素人ながら考えるんですけれども。世界大学史の中に東亜同文書院なり愛知大学を位置づけるという講義の中で、当然近代の高等教育ですから日本の高等教育史というのが表に出てくるというのはよく理解できるんですけれども、それだけで言うたとえば日本であれば、帝国大学の歴史であればその流れの中で世界（つまり西欧）ではこうなっています、日本ではこういうふうになって帝国大学ができましたということでもいいと思うんですけれども、ある意味では特殊な事情を持っているところで言うと、西欧の高等教育はもちろん重要なんですけれども、その一方で例えば中国の高等教育だとか、あるいは京城帝大、台北帝大で言うならばそういった朝鮮半島の高等教育機関の歴史の中にもう1つ位置づけていく。だからコウモリみたいなことをむしろプラスに考えて、もちろん日本の歴史の中に位置づけるというのも重要ですが、もう一方中国の中ではどうだったのかを位置づけるという見方が今後必要になってくるだろうと。その中国の中でという時に、むしろわれわれがもうちょっと公平な客観的な史観をそこに取り入れるということが必要なのではないかと思います。

森久男 先ほど大島先生から同文書院大学が日本の旧制大学の中でどう位置づけられたかという問題提起をされましたけれども、私は視点を変えて、戦前の植民地体制の人材養成のための教育機関として、同文書院大学以外に拓殖大学がありました。拓殖大学の前身は台湾協会学校で、そ

の後、東洋協会学校になって拓殖大学になったので、性格が非常によく似ている。それから、大倉喜八郎が創立しました大倉高等商業学校（現在の東京経済大学）、そういう似たような性格を持った学校がいくつかあるので、そういう大学の歴史を調べて横に比較していくと面白い論点が出てくるのではないかという気がします。

植民地研究というのは戦後長い間ほとんど無視されていたんですけれども、80年代ぐらいからだんだん盛んになってきて、90年代に入りまして1つの大きな特徴として、植民地教育史を研究しようという若い人がけっこう増えてきました。そういう植民地教育史研究をやっている人の書いたものを見ていくと案外関連する方向が出てくるのではないかという気がします。

愛大史上の諸問題

大島 もっとこの問題は討論したいんですが、時間も限られておりますので、そろそろ愛知大学本来のところに入っていきたいと思います。愛大事件、遭難、それから大学紛争。大学紛争はちょっとした大学ならいずれも経験するんですが、私50年史を書くにあたっていろんな大学の沿革史を読んでおりますと、どの大学も必ず初期にはいろんな背筋が寒くなるような問題に遭遇しています。それをどう克服していくかで評価が固まっていく。そういう視点でこの3つの事件を見ていく必要があるのではないかと思います。その時に私は思ったんですが、愛大事件でも遭難事件でも、いかに学長が立派なリーダーシップをとったか。本間さんですけれども、実に立派に対処されたかということが非常に印象的に思い浮かびます。

戦前のそういう警察と大学の紛争問題はいくつかあるのですが、一番身近な東亜同文書院で申しますと、東亜同文書院大学は1930年に30周年記念式典闘争という一種の大学紛争と言うか大学民主化の闘争をやっています。その直後だと思えますが、練習航海にいつて上海に寄港した日本

の海軍に対して反戦ピラを撒くという。これは東亜同文書院の学生ではなく、東亜同文書院の卒業生で当時、上海毎日新聞に勤めていたものがやったんですが、大変ショッキングな事件で、当時領事館警察が大学に踏み込んで首謀者と目された安齋庫治らの学生を逮捕するが、結局彼等は直接ピラを撒いたわけではないので、釈放されます。しかもその時の東亜同文書院の院長は近衛文麿で、文麿氏はおもに東京におられた。実際にやっていたのは副院長の岡上梁という人なんですけど、この人は非常に厳しい人で、実際はピラを撒いてないんだけど、だいたい赤いグループとしてその首謀者の安齋庫治等を退学させる。

それに対して愛大事件の場合なんですけれども、やはり戦前と戦後では決定的に違う。戦前は非民主的な旧憲法と治安維持法が存在し、戦後は新憲法であり治安維持法は廃止されている。だから東亜同文書院の場合はいわば戦前。戦前は院長、副院長ですが、副院長が学生と対峙する。停学させたり退学させたり。そこがやはり戦後は戦前と条件が変わっておりますので、大学が一体となって、学長が先頭にたって学生と大学の自治を守ろうとする。こういう基本的な違いがある。そういう意味で、まあちょっと要らぬことを言い過ぎたかと思いますが、やはりこれらの事件を大学のアイデンティティーを形成させるように一体化させていく事件として捉えていいかどうか。そのように理解してよいのでしょうか。あるいは愛大事件について、それからまた薬師の遭難事件についてご報告がございました豊島さんや山田さんに対するご質問とかご意見がございましたでしょうか。

今泉 今までの何人かの方々の発言と関連してきますけれども、例えば50年史の資料は客観的なものとしてありますので、そのまま写真版なりにして本に掲載しております。歴史的事実のほうにいけますと今度の小史でもそうですけど、そこから落ちこぼれなかつたと言うよりも引き上げたものが、本になってしまうことになるわけです。それを例えば正史と仮に言うならば、そこから正史

となったもの、これは面白くない。落こぼれたものの、それを野史なり外史なりと称して日本外史のように作ろうというのはこれも大変なものだから無理です。いろんな方がいろんな形で作るしかない。ただ座談会なり何なりをやって確かにこういうことがあったよというのを記録に留めることは非常に大事で、それはあとあと50年なり100年なり200年なり後に今の流行作家でも昔のことを取材していっぱいベストセラーを書けますので、貴重なものとなる。愛知大学の場合もそういう努力を行なっている。これがきっかけとなって、いい意味での記録を作ってはどうか。

ただ問題なのはいったい何をどういうふうに記録するか。例えば愛大事件でもそうですけれども、さっき森谷先生のお話がありました。私も当時1年生で森谷先生が学生部長の時、今から考えれば私もその後教員をやりましたので、非常に乱暴な態度で学部長室に行ってワイワイやっている、本当に恥ずかしいことです。学生生活の中では当然警察との関係が生じてくる場合がある。例えば、非常に破廉恥な学生が何か破廉恥沙汰になる。それを大学側がもらい受けに行って頭を下げる。そういうふうにやっぱり警察に頭を下げなければならぬこともあるんです。そういうことは言わないんですけど、誰でも常識的に社会生活をしていれば多かれ少なかれ知っているわけです。当然そんなことは正史では取りあげられない。

結局大学史、50年史なり小史なりが眠ってしまうということではいけないので、これをもとに学生への講義、大学史をやらざるを得ない。基本になるのはやっぱり小史だと思うんです。この大学史で歴史的な知識を得たであろうという学生を増やす。やっぱり小史が一番手頃なものだ。それをもとにしてやるしかない。逆に言うところから離れたものを講師となられた方々は面白おかしくと言うと変ですけれども、こぼれているものをそれぞれの立場でお話しになる。上海で同文書院の教職員学生が集団生活して帰国を待っていたことを、仮に私ならば、今の学生はこれを言っても分

からないでしょうけど、武田泰淳の小説の中にもでてくるというようなことを話す。文学好きの諸君だったら武田泰淳を読んでやろうというのが出てくるかも分からない。

やはり大学史や小史から離れてしまうものを講義の中に持っていくというのは難しい。その意味ではリレー形式も今後続けていかれていいと思いますが、やっぱり基本になるのは小史で、それ以外のものは難しだろうと。

大島 ありがとうございます。

山田義郎 いろいろなご発言がありました。同窓会の立場から一言お話をしておきたいと思えます。今泉先生や先のご発言の方は、小史なり50年史なりに盛り込むことができないものをどうやって捨っていくかというお話でしたし、今、6月頃ですか、加藤勝美さんという方が、仮題ですけれども『本間喜一と愛知大学、創設者の群像』というのを書いていらっしゃるということで、大変いいことだと思っているんですが、著者自身もおっしゃっていましたが、学校側の立場の記録あるいは証言はあるらしいんですが、学生側の証言といったものが少ない。同窓会は今年創設55年になりますので、愛知大学創立期の学生達の立場からということで、創設から10年間、正確に言うと11年位ですけれども、昭和32年までの期間を区切って、できごとについてのエピソードの証言集を作るという計画をしており、間もなく執筆者に依頼をします。

例えばこちらにいらっしゃる小崎さんには『同文から愛知大学へ』というものを。それから愛知大学事件についても書いてもらうように考えています。全く学生の側からの話・歴史を、50人ぐらりのリレー方式で作ろうと。そういう中で今の今泉先生やその前のご発言なんかは拾っていただけるかなというふうに思っている次第です。その推薦者ですけれども、各同窓会の支部長から上がってきたのを編集委員会で事件順、できごと順に並べて、先ほどおっしゃった正史に対する副史みたいなものができるかと思えますので、ぜひご支援

いただけるとありがたいと思います。

大島 太田さんどうぞ。

太田明 先日、名古屋教学委員会でこの授業を含んだ新科目の検討会を行いました。そこでは、やはり授業の中に使える資料が少ないという指摘がありました。今回愛知大学の歴史という点で言いますと、確かに『愛知大学50年史』は浩瀚なものです。私はちょっと不安なんです。テーマが非常に限定的なんです、『60年史』もテーマが非常に限定的なんです。今回の講義は『60年史』をテキストにし、それにほぼそったかたちで講義計画が立てられています。ただ『60年史』で扱われているのは、本学の創立、愛大事件、薬師の遭難、大学闘争、学長が担当された三好校舎への移転と、そのぐらいしか含まれていないのです。『60年史』は『50年史』から取捨選択され、最近の事項を付け加えています。抜け落ちているものが多い。『60年史』の内容が非常に限定的だという点は考えておかなければいけないと思います。また講義形式でやらざるを得ないことは確かなんだけど、それが適切かどうかという問題もあります。

もう1つはやはり、本日も同窓生の方が講師としておいでになって話されています。大学の中で行なわれてきた事柄や事件を、それを体験された方が語るというのは確かに意義はあります。その点は認めるのですが、それが現在の学生に対してどう伝わるのか、果たして当事者が期待しているように伝わるのかという問題があると思います。時代の違いといってしまうかもしれませんが、その辺のことはやはり充分考えておかなければいけません。特に伝え方や方法はいつその工夫を要すると感じています。

大島 ありがとうございます。この大学史という講座の、あるいは総合科目の意義とかやり方についてとか、テキストはどうあるべきかという話に入っておりますので、こちらのほうも含めて議論をしていただいて。

大学史の研究法と視角

河野眞 自分の大学の歴史を理解するという今回の企画は大変意義あるものと考えています。直接の機縁は愛知大学をその主要な前身とされる東亜同文書院との関係を中心に整理していこうということであろうと思います。もっとも、東亜同文書院を本学の前身として特筆する度合いがこのところとみに高まっていることは、それはそれで必然性と問題性の両方があると思いますが、それはともかく、身近な組織を歴史学に近い観点から理解することは、重要な試みで共感を覚えます。しかし、またそれだけに、歴史的な事実の裏付けとなる資料を含めて、整理していくことが大事であろうとも感じています。大学史に因んで私の経験を申しますと、自分の専門とのかかわりで、ドイツの幾つかの大学で、昔そこに在籍した教授の活動を調査したことがございます。それも、偉人の研究ではなく、ナチスに加担した大学人の経歴と言う観点からでした。したがって負の歴史を洗い直すような仕事で、それを特にハイデルベルク大学で行いました。同大学には図書館の他に、「大学アーカイヴス」(Universitätsarchiv)があつて、大学関係者の書類や運営の記録を保存しています。聞いてみると、古いもので16,17世紀まで遡るらしいのですが、もっとも、それほど古いところでどこまで詳しい書類が残っているかは疑問です。しかし、書類を意識的に保存していることは事実で、そこで目録を操って、あれこれの書類を見せてもらいました。例えば、大学人でナチスでもあった人物が、その観点から運営していた講座の経費なども調べました。助手をつけることを申請している書類とか、活動のための部屋の設置を申請し、その際の暖房費用あるいは学生を野外実習に連れてゆくにあたっての補助金の申請といったものです。もっとも、私が見ようとした書類は戦後まもなく非ナチ化裁判(というものが当時行われていたのですが)のために持ち出されたまま返却されていないものがあり、必ずしも所期の

成果にはつながらなかったのですが、大学に在籍した教員たちの活動を生の書類で部分的に確認することができました。またアーカイブには専門の職員がいて、外部からの調査にも親切に対応してくれたのには、感銘を受けました。実は、日本でも、大学の歴史について、そうした文書の保存や整理が必要ではなからうかと思うのです。歴史的事実にはさまざまな側面があり、むしろそのときどきの関心によって過去の何に光を当てるかが決まるところがありますので、目下の状況ではほとんど無視されていても、時代や考え方が変われば関心の対象になるような脈絡があっても不思議ではありません。そうしたことを考えると、今回のような機会に、できるだけ原資料を保存し、目録なども作っておくことが必要ではないかと思えます。

また話が少し飛びますが、あるいは最後に触れた点に関わると言うべきかも知れませんが、愛知大学の初期の関係者でも、話題になる人は常に名前が出るのですが、そうでない人もいます。最近も、これまで学内でも頻繁に名前を挙げるわけではなかった草創期の教授が目下の憲法論議のなかで話題になっています。節目の年代ごとに名簿などが整理され、略歴がそえられでもすれば、全体を見渡すことができます。もっとも、略歴の整備は意外に大変で、たとえば基本データである生没年ですら難しい場合があります。特に死亡のほうは難物で、現代人でありながら没年不詳といったことも起きかねないのです。私の専門は欧米が対象ですが、それに類した細かな情報を必要とするところから、大学史についても基本データについて感想を申し上げる次第です。

大島 どうもありがとうございました。今言われたような非常に細かいところまでのアルヒーフはございません。ただ基本資料と言われる教授会議事録、あるいは評議会議事録等は1箇所にとまとめられています。それでも誰かの昇格、誰かの採用、そういったものまでは大学史にはありません。そういうことが必要であるなら今後整える必要が

あります。現在さしあたりそういう状態です。

豊島忠 大島先生が戦前の東亜同文書院と戦後の愛知大学の比較をされました。戦後では愛知大学の例が一般的のようにはいわれましたが、その意見には、疑問があるわけです。当時、大変な社会情勢も悪いなか、本学は別として私立大学では学生運動家はほとんど処分された。公立大学でも例えば全学連の会合に参加というだけで、例えば地方大学では即座に退学処分になる。そういうふうに戦後の地方大学というのは体育会系の人達が主導権を握った。だから学校の左翼化というものに対しては非常に反抗心を持っていた。愛知大学だけがなぜそういうものに対して寛大であったのか。しかも豊橋という地方にありながら極めて異例なと言うか、ちょっと考えられないような対応の仕方だなあと。そこに愛知大学創立について学長の言われた大事な点があるのではないかと私は思います。

藤田佳久 私はそう大して発言はできないんですけども、いろいろお話を聞いて、こういう授業が学生にビビッドな形で受け入れられて、関心をもって愛知大学の評価とか、あるいは今後の愛知大学の中で学生のアイデンティティーがうまく育てばいいなあと思います。そういう点では先ほどもいろいろお話があるように、既存の文献資料だけではなかなか理解できないと思うんです。私は外で市町村史などの編纂をけっこうやってきたことがあって、文書類だけでものを構成してきましたけれども、やはり基本的にはあまり面白くないところがあります。私は地理学でフィールドワークをやるものですから、歩くといろんなものにぶつかります。大学史のフィールドワークも考えられます。例えばいま愛知大学には3つのキャンパスがありますけれども、キャンパスの中を克明に見ても、いろんなものがそこに存在し、発見できるということです。大学史も第何周年記念で編集しなくてはいけないからとあわてて資料を集めるというのではなくて、日常的に資料を集めて、自主的に、佃さんが今やっている大学史にか

かわる資料収集の役割を本格的にすすめていただきたいなと思っております。

それから私は愛知大学の総合郷土研究所の所長を8年ぐらいたったことがありまして、なぜああいう研究所がああいうかたちでできたのかという疑問を持って、古い資料やら古くからの先生方からも聞き取りをした結果、先ほどの話の続きになりますと、書院を中心とした引揚大学と愛知大学、郷土研との関係がやっぱりあったと思うのです。あれはもともと京城帝国大学から就任された秋葉先生が、本館の木造の1室に郷土室というのを作って、それを総合郷土研究所に発展させて、後にはその存在が世に出ていくわけですけれども。その時に秋葉先生とか横山先生とか、いろいろお名前の出た方々が大陸から帰ってきた始点から、これからは東アジアの大陸と日本の本土と比較ができるという研究をすすめたという意気込みでした。だから東アジア全体をカバーできるような非常にスケールの大きな研究ができるんだということで、総合郷土研究所というのを作られ、高い心意気を持って頑張られた。ただお二人とも身体が弱かったせいか、早く亡くなってしまったのが非常に残念ですけれども。そういう事柄が研究の背後にあって、横山先生は三河一円から、戦後緊急入植で農家の人達が入り込んでいく過程の中で次々に発見された土器の数々を集められまして、あまり知られていませんが膨大な土器片が実は愛知大学にあります。総合郷土研究所の展示室の中にも研究施設があって学生がそれを張り合わせて土器を再現したものとか、貴重品もたくさん所蔵されています。大学史の中でもあまり表に出てきてないそういうものを見ていきますと、愛知大学のその時代のエネルギーといったものが伝わってくるような気がいたします。

因みに文学部の組織というのは、その時思ったんですけど、京城帝大の先生方がほとんど作られている。そういう点で講座制という旧制の帝国大学のシステムが文学部にそのまま再現されたという感じがいたします。専攻は今は14ありますが、

もともとの発想の仕方というのは、その時文学部を作られた方々が京城帝大から来られた先生が中心だったからだと思います。総合郷土研究所を作られた心意気は高く、当初はガリ版印刷でニューズレター、今われわれでさえ出さないような速報性のニューズレターを毎週ぐらい出すという、まあびっくり仰天してしまうような作業をやっているわけです。

そういうものを見ていきますと、そこからいろんなものが伝わってきます。研究所だけではなくてもう少しいろんなところを見ていくと、もっと何かあるんじゃないかなという気がします。その辺のところを、佃さんも含め、ぜひうまく発掘していただいて生き生きとした資料にしていればありがたいと思います。

大学史講義の仕方と意義

大島 ありがとうございます。予定した時間を10分過ぎてしまいました。最後に大学史という講座を持つ意味・意義をもう少し考えて、終わりにしたいと思います。私は意義があると思うんですが、その意義について書かれたものがいくつかございます。1つは佃君がこのレジュメに書かれたものです、だいたい大学生は、大学とは何であるのか、愛知大学とは何であるのか知らずに入ってくるわけですね。そういう意味で大学史を学ぶ、あるいは愛知大学史を学ぶということが大事であって、それでアイデンティティーが形成される。しっかりした自分の居場所が分かるということ。もう1つこれは大学史の権威である寺崎昌男氏が、2年ほど前日本私立大学協会で講演したものがございまして、今の学生はほとんどが「不本意入学」であって、なぜ自分がこの大学いるのが分からない、いったい自分は何なんだという非常に不安な気持ちで座っていると。その時にやはり大学史を学ぶと、自分はこういうところにいるんだということが分かって、勉学意欲さえも湧いてくる学生が多いと書いてあります。われわれの

今度の大学史の講座が、果たしてそこまでみんなの勉学意欲を湧き立たせたかどうか自信はありませんけれど、やはりこの講座は今後も続けていかなければならないのではないかと。

因みに日本では21大学で、何らかの意味でこういう大学史の講義をやっているわけです。大概は自校史、自分の大学の歴史であります。この中の立命とか同志社とか明治大学は、近代日本における立命館大学、明治大学という位置づけでやっている。ところがわれわれは何と世界まで視野に入れてやっているわけです。これはよほどわれわれがしっかり勉強しないことには、かえって学生に馬鹿にされる。そこで最初に私がそういう問題を提起したわけですし、そういう意味で一般的には大学史には意義がある。皆さんの側から何かそれについてご意見がある、あるいはやり方としてこうすべきであるというご意見があれば承って、だんだんと終わりにしていきたいと思えます。

鈴木規夫 手短かに発言させていただきます。近代における大学とは、基本的には「ナショナリズムの流行」後のネイション・ステイツが、その「主権」に基づき一定の「普遍性」を体現するものであるということを正当化するために設立形成されてきたという傾向があります。ドイツのベルリン大学がナショナリズムの産物であることは、よく知られているところですが、ネイション・ステイトが世界の究極の形態であるということの意味づけのようなものとして立ち現れてくるわけです。ユニヴァーシティーはもともとコーポラティブな「団体」でありながら、それが「永遠の相の下に」普遍を思考する基体としてのユニヴェルシタスは、他の団体と位相を異にして、ユニヴァースに通底するのだということを、かつて南原繁が説いていたように記憶しています。そうしますと、本学にしても東亜同文書院大学にしても、何れにせよ「国家」との関係はどう考えておくのが問題として浮上してきます。コーポラティブには「国家」という団体とは本来相対的に独立していたので、大学自治というものが担保されていたわけで

すけれど、その「国家」の究極的権力としての「主権」を前提に成り立つ「近代の大学」というものは何なのかという問題です。ご案内のように、東亜同文書院や京城大学などは、「帝国」の影響下の植民地大学みたいな形で運営されていたことがあるわけで、ネイション・ステイツの論理と、普遍性を追究する学問の場としての大学の論理と、大学のコーポラティブな自律性の論理など、複雑に交差する点みたいなものを、その磁場のようなところを本大学史講座の中のどこかにきちんと位置づけておかないといけないのではないかと考えるのです。

また、大学史を講じるということは、歴史を振り返り未来を見つめるためであるとも考えられるのですが、愛知大学を今後どうしていくのかという、ビジョンの共有みたいなものがどこにあるのでしょうか。

現在、ご存知のように、大学の未来を考えるいろんな可能性が出てきています。先ほどのネイション・ステイト・システムの枠の中での大学という位置づけばかりではなく、かつて東亜同文書院が実現していたように、国家的な枠組みを超えたところで、東アジア共同体を支えていく、知的なコスモポリタニズムを追求するような大学を構築していこうということも可能です。EUにおけるエラスムス・プログラムのようなものとのような質的な差異をもつのか、詳しく検討しておく必要があります。単なる「日本」という枠をこえて、東アジア地域におけるいろいろな人材育成という行為が意味をもってくるような時代が到来しているのではないかと考えられます。

ご存知であろうとおもいますが、文科省のほうでも海外に大学の分室とか別館を作ることについての制約がだんだん緩んできていて、外務省が管轄するのかどうかは分かりませんが、文科省の枠の中でも海外における大学別科の設立とか、あるいは大学そのものの設立について道が開けてきております。これが「日本の帝国主義的発想」によるのか定かではありませんが、何れにせ

よ迫りくるグローバリゼーションに対応する1つの対策として登場してきたものなのでしょう。そうしますと、ますます大学史の記述には、愛知大学の未来という点についても、壮大なシナリオを残すような仕掛けをしておかないとまずいのではないかと、ご要望申し上げる次第です。

今泉 私が小史を中心にしろと言ったのは、今現在のことであって、何らかの形でテキストブックなるものが必要だったということを前提にしています。この4月以降開かれようとする講義はそうではないということならば、この小史は十分とは言えません。例えば今この記念センターで出ている議論の中で、先ほど越知氏を中心に作成された既に百数十枚のスライド画像がありますが、さらに何百枚、何千枚というデータバンクを作ることができるようになれば、担当講師の要望に応じて、映像によって講師が自由に説明できるようになる。来年あたり本格的にそのプロジェクトが動き出し、一定の成果をあげれば確実に実現する。そうなりますと小史をテキストとする必要はない。それは単行本で読むことができるという利点がある。小史の場合はきちんとしたものを作ろうと言うよりも、例えば私も50年史編纂の一員ですけれども、執筆メンバーが全然知らずに適当にリライトする、原文から抜粋してまとめて小史にしたということです。ですからこれからはむしろ映像のほうを中心にするということで、今の学生さんから言えばいいんじゃないかなと思います。

同文書院が植民地大学ということでしたけれども、だいたい中国は植民地ではありません。海外にあった日本の高等教育機関として大学で、その点では上海にあった諸外国のミッションスクール系の大学、専門学校と同じです。それから藤田先生が記念報に書かれている上海交通大学を臨時校舎として以降の同文書院について、霞山会と愛知大学そして上海交通大学の若手の研究者達から新しい資料提供がなされたことは、非常に私は感激した。そういう方から将来の同文書院研究の可能性をさぐるのは必要だろうと思います。ただ若い

人のセンターでの活動に対して、それは女性のメンバーの中でおっしゃったけれども、満州国必ずしも過去の事で老人の関心事だけではない、若い人はそういう発想・見方があるんだなあと感じ、さらに活発にやっつけていかねばならないと。

大島 ありがとうございます。だいぶ時間も過ぎて参りましたので、ちょっと先ほど私が言いかけたことを言わせていただきますと、つまり大学史というのは学生にアイデンティティーを持たせること、愛知大学の場合は愛大事件にしる、遭難事件にしる、大学紛争にしる、そういった問題を率直にお話することによって、愛大とはそういういろんな困難を経てきて今日ある、それを自分の力で解決する力を持っていたという話をすれば、愛大の個性が何であるのかということを理解してもらえらるだろうと。そういうことを含めて大学史をやる意味はあろうと思います。

それから今泉さんの意見と私は違って、「世界の中の」というのはお題目とおっしゃるんだけど、実は私は愛知大学というのは探してみれば酒井さんのように初期のプロイセンの大学についてお話される人もいるし、それからフランスの大学のお話をされる人もいるし、それから今度新しく加わってもらいますが、ドイツの大学史について先ほど発言された河野さんもおられるし、そういった潜在力を持っていて、それをうまく引き出すか引き出さないか、という問題が1つあり、もう1つはそれらをうまく1つの流れとして組み立てられるかどうか、理論的な深さを持てるかどうかという問題もある。私はそういう意味では「世界の流れの中における」というのは外してはいけないし、一層それを追究する必要があるというふうに理解したいんですが、偉そうなことを言って結局お題目になってしまうかも知れません。しかしまあ頑張ってみようと思います。

それでは何か最後にご発言がございますか。はい。

北嶋 今回この大学史講義を担当された方も大変苦労をなさったと思いますが、できればそれぞ

れの方がレジュメを作られた段階で打ち合わせをやって、重複があれば除くということで計画を立てていただく。それからさつき鈴木さんがおっしゃった、まあ鈴木さんもお存じだと思うんですが、ユニバーシティーというのはもともと中世の同業組合のことで、これはギルドの同意語 *universitas* という語に由来しています。学生が団体を作って都市当局と対立して運営されていたという点が今日の大学とは違っています。また極めて国際的であり、使用される言葉は当時の教会語であるラテン語であったということで、教師学生たちはあらゆる国から集まってきました。

樋口義治 ちょっとだけお話をさせていただきます。学生数の見込みが大幅に違ったということがございましたけれども、今度豊橋でもやられることになって、今伺っていて非常にいいお話で学生達に聞かせたいと思うんですけれども、豊橋じゅうの1学年がドッと来たら大変なことになりますね。ただ将来的にはこういうのを全学生に聞かせていくというのは非常に重要なことだと思います。学生数の見込みと必修化への展望というのを伺っておきたいと思います。

太田 私が答えるべきものではないんですが、学内での議論に少し触れておきます。履修者数の問題から言いますと、一番最初に北嶋さんのお話しになったこと、つまり「歴史的な知識をどこまで前提できるか」ということと、それから先ほど小崎先生がおっしゃったこと、「つまり履修学生に偏りがあったということ」とは絡み合っています。これは、本学の場合、開講の曜日と時間次第になります。名古屋校舎の場合、金曜日の3時限という時間帯なんですけど、そこに必修科目が入っていない学部は経営学部だけでした。その関係でも経営学部の学生しか受講者がいなかった。それに昼食後ですから、ちょうど気持ちよく睡魔に襲われる時間です。さらに、教室設定の問題がありました。最初に予定されたのは、003教室でした。ご存じの方も多いと思いますが、400名収容可能な地下の大教室、講演会場です。ここに100

名程度の履修者ですと、大部分は後ろに座りますから、マイクを使ってもまったく授業になりません。私の前の海老澤さんの授業を見に行きまして、これでは授業にならないと思い、教室を変更しました。しかし今度はAVの装置がないんです。他の教室はもう他の授業で埋まっていますし、第4週目ぐらいになると100名の授業の教室変更はできません。受講数との関係では非常に教室設定が難しい。

第二に必修化についてです。この授業の設定は常任理事会の提案で、各校地の教学委員会に検討依頼されたものです。最初は必修かどうかという提案だったのですが、教学委員会は必修化はできないというのが最初からの結論だったように思います。つまり1学年1,000名に対して必修授業をやるとすれば少なくとも3回ぐらいの時間が必要になります。それだけの時間枠を用意し、かつ講師が動員できるかということ、これは無理です。将来的にどうかということは何とも言えませんが、必修化することは私はあまり意味がないと考えています。むしろこうした問題に興味がある学生が切り捨てられることを危惧します。逆に言えば、こうした問題に興味がある学生がもっと深く学習できるような枠組みや内容を用意するほうが重要でしょう。

大島 ありがとうございます。

小崎 ちょっと申し上げたいんですが、愛大と同文書院の関係は、最初は隠すようなことになってたんです。本間先生も実際は同文書院というものがあったからこそわれわれはあの混乱の中で創立することができた、といわれたことがあります。ところがそれからだいぶ経ってから石井学長のほうから、そのままでは駄目だから同文書院の話をしてくれと言われて、平成3年でしか入学式のあとに入学記念講演というので、1時間かけて同文書院の話をしたんです。そうしたらそれが最初に出しましたこの小さいパンフレット、『東亜同文書院大学と愛知大学』という小冊子、あの第1冊目が出たんです。それを学生の父兄に配っ

たら反響が非常に大きかった。いろんな反響が出てきて、私はその記録をもらいました。いかに父兄が感激したかということです。今まで愛大は何もない。何もないところでこんな大学を作って何になるのかと思っているような父兄がおられたと思うんですが、さにあらず、100年以上前から既にあつた。こういう歴史があるんだということが学生にも伝わった。それがこういうことをやる初めになったと思います。私はこういうものをずっと続けてもらいたいと思います。

大島 はい。それではいよいよこれで終わりにしたいと思います。予想以上にたくさんお集まりいただいて、私の不手際で討論があちに行ったりこちに行ったりしましたけれど、ものすごく活発でびっくりしました。やる側としまして大変喜んでおります。1つお知らせでございますが、今週から来週にかけて一種の世界大学史と愛知大

史の研究週間になっておりまして、そこにも掲示しておきましたけれども、1週間後の3月17日(土)の13時30分から15時30分まで、愛知大学名誉教授の酒井吉栄氏に「世界大学史と愛知大学」というテーマで公開研究会をしていただきます。関心と時間のある方はぜひおいでください。本日は本当に長時間、いろいろとありがとうございました。

(編集部からのお詫び：せっかく非常に活発なご討論をいただいたにもかかわらず、録音機器の性能が悪く、またそれを操作する技術が不十分であったため、鮮明な録音ができず、活字化できなかった箇所が若干出てしまいました。重要部分はすべて網羅したつもりですが、発言したのに掲載されていないと思われる方もおられると思います。それはそのためであり、心よりお詫びをする次第です。)